

心理テストによって測定された Self-Esteem の研究

菅 佐 和 子

問題

自己概念、自己像、自己感情などを心理学の分野において実証的研究の対象として取りあげられる場合には、それがどのような心の層におけるものであるかということ、および、それがどのような種類のテストによって測定されたものであるかということがまず問題となってくる。

質問紙法によって測定された自己概念を意識水準における自己であるとすれば、投影法によって測られたものは無意識水準における自己であり、SD 法や IMQ (Image Question) によって測定されたものはその中間に位置するものと考えられている。

つまり、被検者自身によって意識され、または感じられている自己が現象的自己とも呼ばれ、質問紙法によって測定されるものであるとすれば、投影法によって測定される自己とは、それとは相異なるものであり、非現象的自己と呼ばれるものに相当するとされる。

その点について、代表的な投影法であるロールシャッハ・テストを例にとると、河合 (1969) は、「投影法によって把握される自己像 (Self-Image) は Self-as-subject の意味と、Self-as-process の両方にまたがっているものとして非常に興味深いものということができる。」と述べており、小此木・馬場 (1972) は、「被検者の自己像や自己評価や自我理想は通常、Ror. テストの上に直接的に表現されるものではなく投影されたものからの解釈として捉えられるのである。したがって、一方からみれば、本人が意識化していない自己がとらえられるところに本テストでの自己の表現の特性があるということができる。(直接的な表現、例えば、「私はこういう人間です。こうありたいと思ってい

ます。自分のこういうところが嫌いです。」といった表現は文章完成テストや質問紙法から得られるが、これらの資料もパーナリティ像を統合する上に重要なものである。) 」と述べている。また、斎藤 (1962) も、ロールシャッハ・テストでは、「こうして得られた結果から、理論仮説を介して、“被験者が自己をどうみているか” ではなしに、“被験者の深層のダイナミックスはどうであるか、また人格機能はどんな状態にあるか、” ということが外的枠組において解釈される。このようにロールシャッハ・テストでは最初のテスト場面から結果の解釈に至るまでの全過程において、被験者が自己をどうみているかという被験者の主体的内的枠組が排除され考慮の外に置かれている。(解釈において “body image” や “self-concept” をとりあげようとする立場はあるがいずれも仮説を介した外的枠組からの把握であり、それも解釈が容易ではない。) 」と述べている。

これらが、わが国における代表的かつ一般的な見解であるが、いずれもロールシャッハ・テストからうかがわれる、または仮説を介した解釈によって把握される自己を、被検者の主観的な所産である自己概念とは別種のものともみなしている。

そこで、そのような2種類の自己の間の関連性について取りあげた研究としては、La Fon (1954) Diller, L. and Riklan (1957) 多田 (1968) 藤原・遠藤 (1975) などがあげられる。これらにおいては、現象的自己の測定のためには質問紙法 (主として評定尺度法) が用いられ、非現象的自己を把握する材料としてはロールシャッハ運動反応 (主としてM反応) が取りあげられる傾向が多くみられる。ロールシャッハ反応のうちでM反応が主に取りあげられたの

は、「個人が社会的環境に対して向ける共感感情の質は、彼自身の像を反映する傾向があるから、自己の像をみる手がかりを、M反応の質と内容に見出すことができる」。という Klopfer, B. (1954) の仮説に基づくものであると考えられる。

本研究は、上記の諸研究に示唆を受けながら、評定尺度法などの質問紙法のみではなくそれよりもやや投影法に近い文章完成法を中心的に取りあげ、それによって測定された自己感情と、ロールシャッハ・テストおよびバウム・テストなどによって測定された自己感情との間の関連性について調査・検討しようとするものである。従来、文章完成法自体も投影法の範疇に属すると言われているが、筆者自身は、ロールシャッハ・テストやバウム・テストに比べると、文章完成法は反応に際して自己を意識する度合がはるかに高く、それが反応内容に影響をおよぼすことが考えられるため、より意識水準に近いものではないかと思う。しかし、反応のパターンを通して意識化されていない自己をうかがうことができることなどから、質問紙法に比べるとより無意識水準に近いものであると考えられ、本研究においては、文章完成法からうかがわれる自己感情は質問紙法によるものと投影法によるものとの中間に位置するものと仮定された。

本研究の次なる特徴は、自己を取り扱う際、終始一貫して自己感情に焦点があわされることである。これは、筆者が、適応との関係という観点から自己を問題とする際に最も重要なのは、概念の内容や像の種類そのものよりもむしろ、それらに伴う感情の質であると考えた故である。

そこで本研究においては、各々のテストからうかがわれる自己感情のポジティヴさの度合をその被検者の Self-Esteem (以下、SE と略記) とみなすと操作的に定義した。つまり、あるテストのある反応にあらわれている自己感情がポジティヴなものであるほど SE が高く、ネガテ

ィヴなものであるほど SE が低いとみなされるわけである。なお、本研究においてはポジティヴという用語の内に自己肯定的、受容的、好意的、満足的、尊重的などの感情が包含され、ネガティヴという用語の内に自己否定的、非受容的、嫌悪的、不満足的、憐憫的などの感情が包含されるものと仮定されている。

第三の特徴は、被検者の選択に関するものである。そもそも自己を問題とする場合には被検者群の年齢、性別、知的水準、文化的社会的要因、テストへの構えなどが結果に大きな影響をおよぼすものである。故に、「文章完成法による SE と、投影法による SE との間にどのような関連性があるか」という問に対しても、不特定多数の被検者に妥当する普遍的一般的な結果を得ることは不可能ではないかと思われる。そこで、本研究においては、青年期後期を対象にして、相異なる条件下にある3つの小グループの各々に対して独自に調査が行われ、その結果が並列的に示された。本研究で対象とされた3群とは、大別すれば学生群と臨床群であり、学生群はさらに男子大学生群と女子看護学院生群に2分される。(本稿においては男子学生群はA群、女子看護学院生群はB群、臨床群C群と略称される。)

これらの3群は、年齢的にはほぼ同世代に属するが、それ以外の点では相互に相異なる特徴を有しているとみなされるものである。

目的

各種の心理テストによって測定された SE 間の関連性を、〈検査1〉〈検査2〉〈検査3〉を行って調査し検討する。

〈検査1〉

(1) 被検者；A群(男子大学生・19名・平均年齢 19.9才・range 18才〜24才)

(2) 測定用具^{註1)}；(イ) 文章完成法(これによって測定された SE が C-SE と命名された。) 40項目の各々について、ポジティヴな自己感情があらわれているとみなされるものに対して+

2点, ネガティブとみなされるものに対して0点, それ以外(中性的, 両価的, 不明)に対しては+1点が与えられ, それらの合計がその被検者の C-SE とされた。(ロ) ロールシャッハ・テスト(以下, ロ・テストと略記。これによって測定された SE が R-SE と命名された。)M反応の各々について, ポジティブな自己感情が反映していると解釈されるものに対して+1点, ネガティブと解釈されるものに-1点, それ以外のものに0点が与えられ, それらの合計がその被検者の R-SE とされた。(ハ) バウム・テスト(以下, バ・テストと略記。これによって測定された SE が B-SE と命名された。)描かれた樹木の絵について, 筆線の力強さ, 大きさ, 幹の状態などの10項目に関して筆者による3段階評定(+1点~-1点)が行われ, それらの合計がその被検者の B-SE とされた。

各 SE ごとに, 被検者はスコアの高い順に順位づけされた。

(3) 結果; ①各 SE の平均と標準偏差は Tab. 1, に示されている。

Tab. 1 A群における各 SE の平均と標準偏差

	平 均	標 準 偏 差
C-SE	34.36	3.58
R-SE	0.31	1.59
B-SE	2.47	3.20

② C-SE と R-SE および B-SE との相関を求めた。(スピアマンの順位相関による。)相関係数は Tab. 2 に示された通りである。

Tab. 2 A群における C-SE と R-SE および B-SE との相関係数

	C-SE
R-SE	-0.18
B-SE	0.06

この Tab. 2 より, C-SE と R-SE および B-SE の間にはほとんど相関がみられなかった。

<検査2>

(1) 被検者; B群(女子看護学院生・21名・

平均年齢20.4才・range 18才~25才)

(2) 測定用具; (イ)文章完成法(ロ)ロ・テスト^(注2)(ハ)バ・テスト(ニ)IMQ(これによって測定された SE が IMQ-SE と命名された。)IMQ の全14項目のうちで現実の自己像に関する7項目のみが取りあげられ, 各々, ポジティブな自己感情(IMQにおいて feeling tone と命名されているものに相当)をあらわしているとみなされるものに+1点, ネガティブとみなされるものに-1点, それ以外のものに0点が与えられ, それらの合計がその被検者の IMQ-SE とされた。なお, (イ)(ロ)(ハ)による SE および各 SE の順位づけの手続きは, 検査1と全く同様である。

(3) 結果; ①各 SE の平均と標準偏差は, Tab. 3 に示されている。

Tab. 3 B群における各 SE の平均と標準偏差

	平 均	標 準 偏 差
C-SE	35.90	4.98
R-SE	0.20	1.83
B-SE	2.95	2.29
IMQ-SE	6.04	2.23

② C-SE と R-SE, B-SE, IMQ-SE との相関を求めた。(スピアマンの順位相関による。)相関係数は Tab. 4 に示された通りである。

Tab. 4 B群における C-SE とその他の SE との相関係数

	C-SE
R-SE	0.34
B-SE	0.24
IMQ-SE	0.42

この Tab. 4 より, C-SE と IMQ-SE の間にかなりの相関がみられ, C-SE と R-SE の間に低い相関がみられた。

検査1・検査2を通じての考察

C-SE と R-SE との間には, B群においては低い相関があったがA群においては相関はなかった。C-SE と B-SE の間には, 両群とも相関

はなく、B群にのみ施行された IMQ については、C-SE と IMQ-SE の間にかなりの相関があった。

C-SE と IMQ-SE の間にかなりの相関がみられたのは、文章完成法と IMQ とが形式こそ異なるにせよ、両方とも質問紙法と投影法との中間をゆくものであってほぼ同じ心の層を測定の対象とする故ではないかと思われる。それに比べるとロ・テストとバ・テストはテストそのものが自己への直接的関心を喚起しない形で施行されるものであり、自己以外のものに関してなされた反応を材料として自己感情を外側から類推するものであり、文章完成法からうかがい知られる自己感情とはやはり相当の隔絶があるのであろう。特にバ・テストは非言語的な反応であり、ロ・テストよりも一層、自己記述からは遠い存在と考えられる。

ここでは、本人自身の言語表現を媒介として解釈によって算出された R-SE に関して検討してみたい^{注3)}。

R-SE に関して、B群では C-SE との間に低いながらも相関がみられたが A群ではみられなかった。そこで確認のため、各群ごとに C-SE の高い者と低い者（約半数ずつ）との間で R-SE に差があるか否かを調べたところ、B群においてのみ 5%水準で有意差がみとめられ、C-SE の高い者は低い者よりも R-SE が高いことが判明した。しかし、A群ではそのような傾向すらみられなかった。（t 検定による）

このような B群の結果は、前出の藤原・遠藤の研究結果と一致するものである。藤原・遠藤の研究と本研究の検査 2 は、被検者の年齢・性別およびロ・テストを集団式にて実施した点が共通である。そこで、本研究の検査 1 においてそれらと異なる結果が生じたのは A群が男子であったこと、または、ロ・テストが個別式にて実施されたことおよび両条件の相乗効果、のうちのいずれかに原因を求めることができよう。ただし、本研究の範囲ではいずれとも決定することはできないので、ここでは双方の要因の可能

性について若干の考察を行うにとどめたい。

まず、テストの施行法の相違に関しては、ロ・テストが本来は被検者とテスターとの関係の中でなされる協同作業であることを考えると、集団式の場合にはテスターとの関係が個別式の場合とは質的に異なるものとなるため、集団内における個人作業の様相が強くなるはずである。また、反応を各自に記入させたので、どうしても意識によるチェックが強くなり、個別式で行われた場合よりも文章完成法などとの類似性が高まるのではないかと考えられる。

次に、被検者の特徴としては、性差と、同じ学生であっても A群は一般の大学の主に教養部の学生であり、B群は高等看護学院の学生であって、後者の方がより専門性が高く、より限定された領域にあることが、客観的な条件の差異としてみとめられる。そこで、そのような相異なる条件を有する A群と B群との主観的世界における特徴を文章完成法の反応から明らかにしたい。例えば、「私は将来」という項目に対して、B群では約 80% が、「よい看護婦になりたい」「平凡な家庭の主婦になるだろう」「看護婦になって、結婚する」といった具体性の高い反応を行っているが、A群では具体的な職名や計画をあげたのは 11% に過ぎず、あとは、「将来のことを考えるのはおそろしい」「将来どうなっているのだろうか」「何か社会のために尽くしたい」「大きなことをやり遂げてパッと死にたい」といった抽象的、心情的な反応が多い。「私の最大の希望」という項目については、個人的、具体的な生活設計に関するものが B群では 52% を占めるが、A群では 11%、社会や国家に関するものが B群では 10% だが A群では 21%、抽象的、心情的、その他に属するものが B群では 38% だが A群では 68% にのぼっている。

これらの諸反応より、B群の被検者の関心は現実的で個人的な問題に集中しているが A群では関心の対象が外的にも内的にもより広く、漠然として抽象的な傾向が強いことがうかがえた。また、B群では将来の職業に対するアイデ

ンティティがすでにある程度確立しているが、A群ではまさに暗中模索の状態であり、モラトリアムの状態にあるとみなされた。

また、「私の身体」という項目に関しては、B群の76%が主にスタイルに関する不満や悩みを表現しているが、A群では34%に過ぎず、外貌に関してはB群の方が自己をネガティブにとらえている。しかし、「私の心」という項目では、B群の38%に対してA群では63%がネガティブな感情を表現しており、心については身体とは逆の傾向がうかがえた。つまり、B群の被検者は外貌に関しては自信がなく、悩みを持っているが、精神面では自己をポジティブに感じており、A群の被検者は外貌に関する悩みは少ないが精神面には不安定さや焦燥感をかなり強く感じている存在であるとみなされる。全体的な印象としても、A群はB群よりも、複雑、抽象的、両価的、個性的、不安定な傾向が感じられ、それだけに意識水準と無意識水準との間の屈折も大きいのではないかと考えられ、それがテスト結果にも影響を与えていると推測することは不可能ではないと思われる。以上、検査1と検査2を比較しながら考察を行った次第である。

＜検査3＞

(1) 被検者；C群（神経症圏内の精神科受診者・12名（男子9名・女子3名）平均年齢24.3才・range 19才～27才）

(2) 測定用具；(イ) 24項目よりなる7段階の評定尺度法の質問紙で自己に対する満足度を測定するもの。（これによって測定されたSEが、P-SEと命名された）。各尺度に定位された+1～+7の評定点の合計が、その被検者のP-SEとされた。(ロ) ロ・テスト (ハ) バ・テスト
なお、(ロ) (ハ) によるSEおよび各SEの順位づけの手続きは、検査1と全く同様である。

(3) 結果；①各SEの平均と標準偏差は、Tab. 5 に示されている。

Tab. 5 C群における各SEの平均と標準偏差

	平 均	標 準 偏 差
P-SE	81.41	19.16
R-SE	0.58	1.18
B-SE	-0.58	3.17

② P-SE と R-SE, B-SE との相関を求めた。（スピアマンの順位相関による）相関係数はTab. 6 に示された通りである。

Tab. 6 C群におけるP-SEとその他のSEとの相関係数

	P-SE
R-SE	0.51
B-SE	0.19

このTab. 6より、P-SEとR-SEの間にかんがりの相関がみられた。

(4) 考察；C群に対しては文章完成法に代わるものとして評定尺度法が行われたが、これは完全に意識水準を対象とした質問紙とみなされる。しかし、それにもかかわらず、P-SEとR-SEの間にはC-SEの場合よりも高い相関がみいだされた。もし、2つのテストで測定されたSE間の関連性が、それらのテストが対象とする心の層によって決定されるとすれば、P-SEとR-SEとの関連はC-SEとR-SEとの関連よりも小さいことが期待される。しかし検査の結果は逆であり、この結果を偶然的な例外とみなさないと仮定すれば、やはり結果によらず被検者の特徴という要因を考えざるを得ない。

C群の被検者は、神経症であるという点でA群、B群の被検者とは適応の水準を異にしているとみなされる。彼等の主訴はほとんどが何らかの形で身体に関するものであり、内面的な葛藤や苦悩の訴えが乏しく、自己洞察がなされにくいのが共通した特徴である。主訴の例としては、頭痛、心臓への不安、首の回らない感じ、眼球の異常感などがあげられ、診断的には不安神経症、心気症、転換ヒステリーなどの範疇に

属するものとみなされよう。

彼等は、高まった不安が自我の防衛機制の作用によりもっぱら身体的なものに固着しているケースと考えられる。そこでロ・テストの反応を眺めてみると、C群の反応はA、B群に比べて量的にも質的にも貧困であり、ひとりあたりの平均M反応数も、A群の4.0個（標準偏差 2.18）B群の4.9個（標準偏差 1.98）に比べて有意に少ない1.4個（標準偏差 1.32）に過ぎない。（いずれも $P<.01$ ）

このように反応数には顕著な差を有しながら、R-SE にはそれがあらわれていないのは、A、B群の場合は同一被検者にポジティブなMもネガティブなMも混在しており、それらが相殺しあってスコアが低下するのに、C群の場合にはネガティブなMが皆無に近いためスコアが低下しない故である。つまり、A、B群では、ネガティブな感情があらわれているが形体水準の高い独創的なM反応が数多くみられ、C群にはネガティブな感情はあらわれていないがごくありきたりの平凡なM反応しかみられなかったわけである。そこで、M反応にあらわれている感情は、人格の統合性や適応の水準といった事柄とは直接の関連を有せず、それぞれの適応の水準の枠内において、意識化された自己感情との間に何らかの関連を有するに過ぎないと考えられる。しかも、その場合にも、関連性の度合は決して一定ではなく、被検者の条件によってかなり異なると思われるのである。以上、C群の結果について、A、B群との比較をまじえつつ考察した次第である。

検討

本研究で行った3つの検査は、各々、測定用具や実施方法に若干の相違があるため、一律に比較検討することは困難である。しかしそれらを考慮しながら総合的に解釈すると、相異なる心の層を対象にしたテストにより測定された2種のSE間の関連性は、被検者が内的に複雑で両価的な傾向を持っている場合ほど低く、単純

で了解し易い場合ほど高いのではないかと考えられた。故に本研究の範囲内では、現象的自己と非現象的自己との間にどのような関連性があるかという問に対しての一般的な結論は予想した通り下し得なかった。本研究の結果は、実証的研究の対象として自己を取りあげる場合に、被検者の条件を変数として重視することの必要性を示唆している。

今後の課題としては、等しい条件を備えた被検者よりなる各群の人数を増やし、測定用具を完全に統一した上で、さまざまな群における関連性の度合を調べ、それらを比較検討することが望まれる。（博士課程大学院生）

〔注1〕本研究で用いたテストの具体的な内容は付表1～3に示した。（但し、ロールシャッハ・テストとバウム・テストは周知のもの故省略）文章完成法は国立大阪南病院で使用されているものに準じた。IMQは京都大学の梅本他により作成されたものである。評定尺度法の質問紙は筆者が作成したものである。

〔注2〕検査2においては、ロ・テストは集団式にて実施された。図版はスライドにより提示され、反応は自発反応段階と質疑段階に分けて各被検者に筆記させた。

〔注3〕M反応にあらわされている感情に対する判定に際しては、判定基準やスコアリングの方法を変えて何度かSEを算出し直してみたが、いずれも本稿で用いた手続きとの間に大きな相違は生じなかった。しかし、これらはいずれも筆者の解釈による判定であるため、更に修正を重ねることが必要である。

参考文献

1. Diller, L. and Riklan, M. (1957) Rorschach correlates in Parkinson's disease: M, motor inhibition, perceived cause of illness, and self-attitude. *Psychosom. Med.*, Vol. 19.
2. 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 (1974) Self-Esteemの研究。九州大学教育学部心理学部門紀要。Vol. 18, No. 2.
3. 藤原正博・遠藤辰雄 (1975) Self-Esteem の心理学的研究 (VII), 日本心理学会第39会発表論文集
4. 林 勝造・一谷 彊 (1973) バウム・テストの臨床的研究, 日本文化科学社
5. 河合隼雄 (1969) 臨床場面における ロールシャッハ法. 岩崎学術出版

6. Klopfer, B. et al. (1954) Developments in the Rorschach Technique. Vol. 1. Yonkers-on-Hudson: World Book.
7. La Fon, F. E. (1954) Behavior on the Rorschach test and a measure of self-acceptance. Psychol. Monogr., 68, No. 10.
8. 西平直喜 (1973) 青年心理学. 共立出版
9. 小此木啓吾・馬場礼子 (1972) 精神力動論. 医学書院
10. 斎藤久美子 (1962) ロールシャッハ・テストと一質問紙法 (自己評価法) による適応の研究. ロールシャッハ研究 V 誠信書房
11. 多田治夫 (1968) ロールシャッハ運動反応と自己像の関係, ロールシャッハ運動反応の研究. 宮孝一教授還暦記念論文集刊行会
12. Wylie, R. C. (1961) The Self-Concept: U. of Nebraska Pr. Lincoln.

付表 1 文章完成法の項目内容

- (1) 知りたいことは
- (2) 私が小さい時には
- (3) 私は将来
- (4) 恐ろしいことは
- (5) 私の父は
- (6) 他人に指示する場合私は
- (7) 男女の交際
- (8) 私のきょうだいは私に
- (9) 今迄のことでよく覚えているのは
- (10) 私の体
- (11) 私の好きな人は
- (12) けんか
- (13) 私がうらやましいのは
- (14) 男の友達
- (15) 学校では
- (16) たいていの家庭は
- (17) 私の不満は
- (18) 私の母は
- (19) 私の学校の先生は
- (20) 私の最大の希望は
- (21) 死
- (22) 私の服
- (23) 母より父が
- (24) 不安に思うことは
- (25) 私は人にくらべて
- (26) 私がよく感じることは
- (27) 女の友達
- (28) 病気
- (29) 私が嫌いな人
- (30) たいていの男は

- (31) 父に比べて母は
- (32) 運動神経
- (33) 忘れてしまいたいのは
- (34) 私の長所
- (35) たいていの女は
- (36) 気がとがめるくせは
- (37) 男女
- (38) 私が嫌うことは
- (39) 私の心
- (40) 今日私は

付表 2 IMQ の項目内容

- A. わたくしは に似ているようです。
それはわたくしが からです。
1. わたくしは 動物 にたとえると に似ているようです。
それはわたくしが からです。
 2. わたくしは 植物 にたとえると に似ているようです。
それはわたくしが からです。
 3. わたくしは 動植物以外 にたとえると に似ているようです。
それはわたくしが からです。
 4. わたくしは 動物 にたとえると には似ていません。
それはわたくしが からです。
 5. わたくしは 植物 にたとえると には似ていません。
それはわたくしが からです。
 6. わたくしは 動植物以外 にたとえると には似ていません。
それはわたくしが からです。

付表 3 評定尺度法による質問紙の項目内容

1. 身体 of 健康
2. 行動力
3. 気持の純粋さ
4. 集中力
5. 人に信頼される
6. 活力
7. スタイル
8. 頭のよさ
9. 経済力
10. 顔立ち

菅：心理テストによって測定された Self-Esteem の研究

11. 計画性
 12. 機敏さ
 13. 社交性
 14. 明朗さ
 15. 落ち着き
 16. 指導力
 17. 男（女）らしさ
 18. 考え深さ
 19. 判断力
 20. 友人関係
 21. 人を信頼する
 22. 家族関係
 23. 仕事の能率
 24. 人に好かれる
-